

上野殿御返事

弘安三年一二月二七日 五九歳

驚目一貫文送り給び了んぬ。

御心ざしの候へば申し候ぞ。よくふかき御房とおぼしめす事なかれ。

仏にやすやすとなる事の候ぞ、をしへまいらせ候はん。人のものををしふると申すは、車のおもけれども油をぬりてまわり、ふねを水にうかべてゆきやすきやうにをしへ候なり。仏になりやすき事は別のやう候はず。早魃にかわけるものに水をあたへ、寒氷にこどへたるものに火をあたふるがごとし。又、二つなき物を人にあたへ、命のたゆるに人のせにあふがごとし。

金色王と申せし王は其の国に十二年の大早魃あて、万民飢え死ぬ事かずをしらず。河には死人をはしとし、陸にはがいこつをつかとせり。其の時金色大王、大菩提心ををこしておほきに施をほどこし給ひき。せすべき物みなつきて、蔵の中にたゞ米五升ばかりのこれり。大王の一日の御くごなりと、臣下申せしかば、大王五升の米をとり出だして、一切の飢えたるものに、或は一りう二りう、或は三りう四りうなんど、あまねくあたへさせ給ひてのち、天に向かはせ給ひて、朕は一切衆生のけかちの苦にかはりてうえじに候ぞと、こゑをあげてよばはらせ給ひしかば、天きこしめして甘露の雨を須臾に下し給ひき。この雨を手につれ、かをかゝりし人、皆食にあきみちて、一国の万民、せちなほに命よみがへりて候ひけり。

月氏国にす達長者と申せし者は、七度貧になり、七度長者となりて候ひしが、最後の貧の時は万民皆にげうせ、死にをはりて、たゞめおとこ二人にて候ひし時、五升の米あり。五日のかつてとあて候ひし時、迦葉・舍利弗・阿難・羅睺羅・釈迦仏の五人、次第に入らせ給ひて、五升の米をこひとらせ給ひき。其の日より五天竺第一の長者となりて、祇園精舎をばつくりて候ぞ。これをもてよろずを心へさせ給へ。

貴辺はすでに法華經の行者に似させ給へる事、さるの人に似、もちみの月に似たるが如し。あつはらのものどものかくをしませ給へる事は、承平の将門、天喜の貞任のやうに此の国のものどもはおもひて候ぞ。これひとへに法華經に命をすつるゆへなり。またく主君にそむく人とは天御覽あらじ。其の上わづかの小郷にをほくの公事せめにあてられて、わが身はのるべき馬なし、妻子はひきかゝるべき衣なし。

かゝる身なれども、法華經の行者の山中の雪にせめられ、食ともしかるらんとおもひやらせ給ひて、ぜに一貫をくらせ給へるは、貧女がめおとこ二人して一つの衣をきたりしを乞食にあたへ、りだが合子の中なりしひえを辟支仏にあたへたりしがごとし。たうとし、たうとし。くはしくは又々申すべし。恐々謹言。

十二月二十七日

日 蓮 花 押

上野殿御返事